

# キジバト 英:Oriental Turtle Dove 学: *Streptopelia orientalis*

## 1. 分類と形態

分類: ハト目 ハト科

全長: 33-35 cm  
 翼長: ♂192-201 mm ♀188-196 mm  
 尾長: ♂126-142 mm ♀124-138 mm  
 露出嘴峰長: ♂16.3-18.2 mm ♀15.3-18.3 mm  
 ふ蹠長: ♂25.5-29.1 mm ♀24.7-29.3 mm  
 体重: 165-274 g

※ 全長と体重はdel Hoyo *et al.* (1997), その他はCramp (1985)による。

### 羽色:

雌雄同色。頭部から胸、腹にかけてはブドウ色を帯びた灰褐色で、頸の左右両側に黒色と青灰色の縞模様様の斑がある。翼には、黒褐色に赤茶色の縁取りのあるうろこ模様がある。尾は黒色で、先端と両端の羽の外側が灰白色。嘴は灰黒色で、脚は紫赤色、光彩はオレンジ色である。



写真1. キジバト。  
[ Photo by 谷英雄 ]

### 鳴き声:

デデッポーポーと連続して鳴くのが特徴。求愛行動の時には、喉を膨らませておじぎをするような行動に合わせてクーーといった声を出す。また、威嚇する時には、ブンツという短い音を発することがある。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ユーラシア大陸中央部から東の地域、西シベリア、インド、中国、ベトナム、日本や韓国などに生息する。中・低緯度地域では留鳥だが、高緯度地域で繁殖する個体は越冬期には南下する。国内では全国的に分布し、亜種キジバト (*S. o. orientalis*) が主に九州以北、別亜種のリュウキュウキジバト (*S. o. stimpsoni*) が屋久島、奄美諸島、琉球諸島に生息する。本州以南では留鳥だが、北海道や本州北部の個体は南下して越冬する。

### 生息環境:

農耕地とその周辺の雑木林などによく見られるが、亜高山帯から市街地までさまざまな環境に生息する。かつては「ヤマバト」と呼ばれ、低地林に多く生息していたと考えられるが、最近では都市や住宅地でも普通に見られる。

## 3. 生活史

### 繁殖システム:

一夫一妻で、雌雄ともに造巢、抱卵、ヒナの世話をを行う。つがいは、片方が抱卵や抱雛を行っている時を除き、共に行動することが多い。

巢: 小枝を組み合わせた皿状の巢。粗雑で簡単な構造の巢で、造巢に要する時間は4日程度。巢の高さは0-10mで、平均すると2-4mの高さの巢が多い。普通、巢は樹上に作られるが、地上から数十cmの茂みの中にも作られることがある。

### 産卵から巣立ちまで:

一腹卵数は通常2卵で、白色の小さな卵を産む。雌雄ともに抱卵を行い、日中は雄、夕方から朝までは雌が連続して抱卵する。抱卵期間は14-16日、孵化後4日程度は常に親が巢に滞在し、抱雛する。ヒナの皮膚は灰黒色で、孵化した時から黄色い綿毛がまばらに生えている(写真2)。



写真2. 孵化後5日目のヒナ。

ハト類に共通する特徴として、親鳥が嗉嚢(そのう)からピジョンミルクを分泌し、ヒナに与えるという行動がある。ピジョンミルクはたんぱく質や脂質などの栄養分に富むカッテージチーズ状の物質で、雌雄ともに分泌する。ヒナには最初ピジョンミルクのみが与えられるが、徐々に親と同じ食物(草本の種子、穀物など)の割合が増えていく。育雛期間は14-17日で、ヒナは親鳥の60%程度の体重で巣から離れ、巣立ち後も親から給餌を受けて成長する。

### 繁殖期間:

キジバトの繁殖期間は長く、場所によっては一年中繁殖が見られる(図1)。これは、ピジョンミルクをヒナに与えることと関係があると言われている。多くの鳥類では、ヒナに与える餌が豊富な時期に合わせて繁殖を行うが、ハト類の場合は、成長に必要な栄養分が豊富に含まれているピジョンミルクをヒナに与えるため、餌資源の変動に左右されることなく、繁殖を行うことができる。キジバトの繁殖のピークは、むしろ親鳥にとっての餌資源の豊富さに対応するという報告がある(中尾 1984)。繁殖のピークは場所によって異なり、北海道や岩手では5月下旬~6月、京都では8月~9月の一山型、茨城や愛知では二山型のピークを持つ。しかし、ピークの時期や回数は、年によって異なることもある。

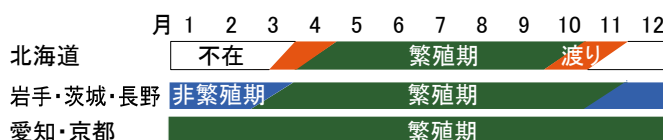


図1. 地域によって異なるキジバトの繁殖期。

## 4. 興味深い生態や行動、保護上の課題

### ● 繁殖成功と過去の営巣履歴

キジバトは、長い繁殖期間の中で何回も繁殖を行うことがある。1年に8回繁殖を試みた例や、年間4回繁殖を成功させた例もある一方で、1回しか繁殖しない個体もいる。キジバトの繁殖の失敗と成功は、次の繁殖における営巣場所選択や成功率と関係がある。Wada(1991)は、繁殖が成功した場合、同じような巢の高さや幹からの距離を選んで営巣することを明らかにし、前回の繁殖成功がキジバト自身の次の繁殖場所選択に影響を与えていることを示唆した。逆に、過去に失敗した巢を短期間(60日以内)に再利用した場合には、繁殖が失敗しやすいことがわかっている(Wada 1992)。このように、キジバトの過去の営巣履歴は、何らかの形で次の繁殖に影響を与える可能性があると考えられる。

## ● 捕食者と対捕食者行動

キジバトの巣あたりの繁殖成功率は、季節や年によって異なるが、他の鳥類と比較して低い。繁殖が失敗する原因は、主に捕食である。ハシブトガラス、ハシボソガラス、オナガ、ネコ、アオダイショウが、卵やヒナの捕食者として報告されている。巣に近づいた捕食者に対しては、親鳥は、翼を打ちつけたり、巣から飛び降りて擬傷行動を行うことがある。これらの行動は、ヒナや卵の捕食を回避するための行動とも考えられる。しかし、調査者に対するこれらの行動の有無と、営巣場所の特徴や環境条件、季節、ヒナの日齢、繁殖成功率との間には、有意な関係はみられていない(Kameda 1994)。キジバトは、営巣場所選択や対捕食者行動により捕食者回避を行わない訳ではないが、それらが繁殖の成功につながっている証拠は見いだされていない。

## ● 繁殖戦略 一腹卵数と複数回繁殖の有利性

既に述べたように、ハト類の一腹卵数は2卵と少なく、卵サイズも成鳥の体サイズと比較して小さい。小卵少産という特徴は、ハト類の繁殖戦略において重要な意味を持っている。すなわち、捕食圧が高いキジバトの場合には、一度にたくさんの産卵を行うよりも、一回の繁殖で育てるヒナの数を減らし繁殖回数を増やすほうが、繁殖戦略上有利である可能性が考えられる。



写真3. 実験的に3羽にした巣。孵化後10日目。

Kameda (1996) はこのことを調べるために、ヒナが1羽と3羽の巣を実験的に作り、繁殖成功率や成長率が通常のヒナ数である2羽の巣と異なるかどうかを調べた(写真3)。平均巣立ちヒナ数は3羽の場合に2羽の場合よりも多くなることがわかったが、ヒナの巣立ち時の体重は軽く、一番小さいヒナは他のヒナよりも長く巣に留まるため、育雛期間も長くなる傾向があった(図2)。さらに、体重が小さい状態で巣立つことは、その後のヒナの生存率や親からヒナが独立するまでの期間に影響を与えるものと考えられる。ヒナが独立するまでの期間が長くなることは、繁殖期間内の総繁殖回数を減少させる。したがって、一度に多くのヒナを育てることは、高い捕食圧にさらされるキジバトの場合には不利であると考えられる。つまりキジバトでは、高い捕食圧に対して、一回の繁殖における繁殖成功率を増加させるよりも、一回の投資量を減らし繁殖回数を増やすことを選択しているものと考えられる。

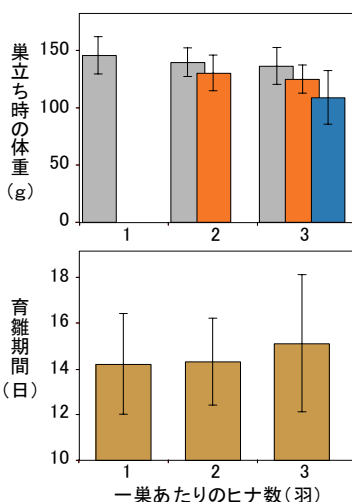


図2. ヒナ数1, 2, 3羽の場合の巣立ちヒナの体重(上)と育雛期間(下)。Kameda (1996)をもとに作図。

## ● キジバトによる食害

キジバトは、農業被害の視点からも研究が行われている。キジバトの主な餌は植物の種子や穀物である。そのため、農耕地付近のキジバトの胃内容物には、農作物が多く含まれ、特に、播種から発芽期のダイズや収穫期のムギなどが主な餌となる(中尾 1984, 松岡・中村 1987)。キジバトによる食害は農作物の季節変化と強く関連しており、餌となる農作物の豊富さは、キジバトの繁殖期間とも一致することが報告されている。

## 5. 引用・参考文献

- Cramp, S. 1985. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. 4. Terns to Woodpeckers. Oxford University Press, Oxford.
- del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. (eds). 1997. Handbook of the Birds of the World. Vol.4. Sandgrouse to Cuckoos. Lynx Eddicions, Barcelona.
- Kameda, K. 1994. Effectiveness of antipredator behavior of the Rufous Turtle Dove *Streptopelia orientalis*. Jpn. J. Ornithol. 43: 79-89.
- Kameda, K. 1996. Optimal brood size and its limiting factors in the Rufous Turtle Dove *Streptopelia orientalis*. Ecol. Res. 11: 51-60.
- 松岡茂・中村和雄 1987. ダイズのハト害の季節変動とその要因. 日本鳥学会誌 36: 55-64.
- 中尾弘志 1984. 北海道におけるキジバトの生息密度と繁殖成功率の変動. 日本応用動物昆虫学会誌 28: 193-200.
- Wada, T. 1991. A dynamic aspect of nest site choice in the Rufous Turtle Dove, *Streptopelia orientalis*. Physiol. Ecol. Jpn. 28: 1-12.
- Wada, T. 1992. An implicit cost of nest re-use in the Rufous Turtle Dove, *Streptopelia orientalis*. Jpn. J. Ornithol. 40: 43-50.
- Wada, T. 1994. Effects of height of neighboring nests on nest predation in the Rufous Turtle-Dove (*Streptopelia orientalis*). Condor 96: 812-816.

## 執筆者

亀田佳代子 滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員

身近にたくさんいる鳥のほうか、研究しやすいし、わかっていないことも多い、と指導教官に言われて始めたキジバト研究。大学院の5年間、キジバトの巣を探して筑波大学の構内を自転車で走り回り、木に登ってはヒナを測定した。一年のうち9か月間、ほぼ毎日調査に出ていたことが、学生時代の唯一の自信だった。1996年に博物館に職を得てからは、カワウが生態系に与える影響に関する研究に転向。どういう訳だか、「季節感」(非繁殖期)があまりなく「怪獣顔」のヒナを持つ鳥ばかり研究している。でも、彼らのopportunisticでいきあたりばったりの性格は、人間と同じ場所で生活するために彼らが身につけたたくましさとおおらかさではないかと、けっこう感心したりしている。

